ADOLF LOOS『Ins Leere Gesprochen』にみる19世紀末ウィーンの被覆の原理

1g06d007-2　安藤悠＊

Adolf Loos　『Ins Leere Gesprochen』　ウィーン
世紀末　表層

序論

本研究は19世紀末のウィーンにおいて、それまでの様式主義に真っ向から挑んだ建築家アドルフ・ロース（Adolf Loos, 1870-1933)。彼は装飾を犯罪だとして当時の「表層」を批判した事で知られているが、それを言わせた当時のウィーンとはどのようなものだったのか。その背景には世紀末という時代やウィーンという場所が深く関係している。装飾否定をする以前、彼がウィーンの様々な表層を批評しており、それは『 Ins Leere Gesprochen（虚空へ吼える）』[1]にまとめられる。ここには彼の抱く装飾の意義が見え隠れする。本論文では、この一連の批評を研究対象とする。表層とはその内部と外部との境で双方からの影響を受けながら両者の境界を守るものであることは、『被覆と身体装飾の社会心理学』など被服心理学の学問で一般的に語られるが、その本質こそ、本論文の目的地である「被覆の原理」[2]である。世紀末ウィーンは、伝統的な様式、産業革命による機械化と、近代人の合理的な考え方という新旧二つの方向性を併せ持ち、その表層は不安定な状態にあった。それに伴い、当時ウィーンでは多くの著名人-フロイト（Sigmund Freud, 1856-1939)、クリムト（Gustav Klimt, 1862-1918)、クラウス（Karl Kraus, 1874-1936）など-がそれぞれの分野において表層に対し示唆的な作品を残しているが、その中でロースは建築家という枠に固執することなく、他分野の表層の批判も行なった。また、彼の言説は内部でも外部でもない表層のみを対象としているが、その批判は人々の精神にまで及ぶ強烈なものであった。本研究では彼の言説から、19世紀末ウィーンの表層を構成する要因をさぐり、その「原理」に迫ることを目的とした。

第1章 『Ins Leere Gesprochen』の表層に対する言説と分析

表層は世間から個人を差別化しようとする内からの欲求と、個人が世間の均衡を崩さないようにする外からの抑圧を受けていると語られることだある。内からの欲求の力が強く影響している場合その表層は内部を誇張する。一方、外からの抑圧が強く影響している場合、その表層は内部を隠蔽する。ここでは、その構成要因を抽出し「誇張する表層」と「隠す表層」に分類した。[3]（図1）

a, 工芸品について

各地で起こった産業革命に伴い、当時の工芸産業は古くからの伝統的な様式と新しい技術との間で揺れ動いていた。工芸品における外からの圧力とは、主に実用性や技術を重視する考え方である。これは、非合理的な物を排除しようとするものである。この傾向にあるのは、隠す表層に分類されている物たちであるが、比較的新しい技術が用いられた物が多いことが分かる。人々はこれらのもので、自分の好みを表現しようとはしなかった。

一方で内からの圧力とは伝統的な様式を重んじ、自分の身を取り囲むものを自分の趣味に染めたい、他者に良く見られたいという欲求である。この傾向にあるものが、誇張する表層に分類されている物たちであるが、これらの物は同時に実用性など社会からの新しい要求にも影響されており、古いものを時代に合わせて改良するものも存在した。このことから、実用性が重視されたことで、ガラス製品・馬車などは技術を駆使され、古くからあるブロンズ製品・陶器などは時代に合わせて変化をした。

b, 衣服について

衣服は身体に最も密接し、また他者は衣服を含めて人物を捉えるため、内外からの圧力を最も顕著に表す。衣服の構成要素を抽出すると、この表層における外からの圧力とは集団への帰属願望と、機能性を重視する新しい時代の流れがその主なものである。一方、内からの圧力とは自分を美しく高貴に見せたいという欲求であることが分かった。例外的なものは女性の衣服であり、 隠す表層に分類される。彼女たちの服装は内からの欲求に起因していたが、それは男性という他者の求める女性像のことであるためである。

c, 建築について

建築は古くから所有者の権力を象徴する側面を持っていたため、その表層は誇張することに偏りがちであった。しかし、そもそも建築の役割は外界から人の居住空間を守ることであり、この考え方に立ち戻り建築を考えたのがロースであった。誇張する表層に分類された建築が他者の視線を意識して外に向かって建てられたのに対し、ロースの建築は徹底的に内を向いた形で建てられ、表層はその内部を隠蔽した。19世紀は建築においても新しい素材や技術が数多く誕生したが、ウィーンにおいてそれらは内部を誇張する伝統的な様式に落とし込まれ、その発展を阻止されていた。

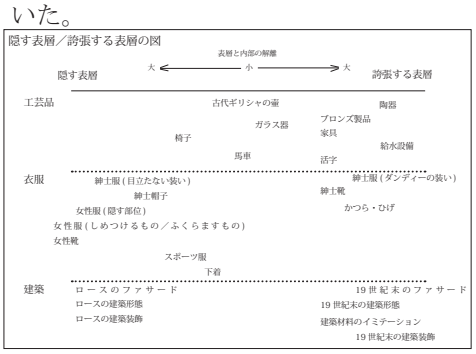


図1　隠す・誇張する表層の分布図　筆者作成

上左：ガラス製品
『Spoken into the void』p37
上右：陶器
『Spoken into the Void』p36
下：オペラ座前の交差点
『ウィーン　芸術と社会』p254

The priciple of cladding of late 19th century in Vienna
-ADOLF LOOS "Ins Leere Gesprochen"-
ANDO Haruka, NAKATANI Norihito

第２章『Ins Leere Gesprochen』の表層の内部に対する言説と分析

ロースは表層を批判するとともに、それが内部に及ぼす影響についても言及している。前章では、内部外部が表層に与える圧力について述べたが、ここでは逆に表層から受ける反作用について分析する。（図 2）

a. 工芸品について

実用性や技術を重視した隠す表層は、それを作る職人たちに自身で感じ、考え、工夫し、作ることを教え、買い手にはそうして作られた快適で正確な物の良さを教えた。4 しかし最大の反作用は、機能性を追求した結果、生じた物たちが人々に美しいと思わせたことだ。これは、それまでの常識を覆すものだった。[5] 一方、様式で作られた誇張する表層は、その複雑な装飾故に職人たちを苦しめた。多様化する様式の要求に応えられず、他分野の支配のもとで制作をはじめたことで、職人自身にデザインすることを忘れさせてしまった。

b, 衣服について

衣服における隠す表層は外部と同調する事で、内部までをも外部と同調することを防ぎ、基本的には内部を保護することが出来ていたといえる。しかし、表層からの反作用の例も見られ無い訳ではない。例えば、衣服において隠すべき体の部位が時と場合により変化し、その隠すマナーが人に恥ずかしいという感情をもたらしたというものだ。これは衣服という表層が人の感情に影響した例である。一方、誇張する表層における反作用は、纏足やコルセットによる身体の奇形化である。こうでありたいという内からの欲求が強く働いた時、その理想によって形成された表層が身体をも変形させる事が分かった。

c, 建築について

ロースの建築のような隠す表層を持つ住居は、その内部を所有者（住人）が支配することを可能にした。そこには他人から見ればガラクタ同然だが、住人の歴史が染み付いた宝物が溢れていた。一方、当時多く存在した誇張する表層を持つ住居は、外部のような内部を有していた。その住居は内部においても様式にあふれ、他者の視線が意識されていたのだ。ここにおいて空間の支配者は住人ではなく、その住居を設計した建築家であった。そして、建築家によって支配された空間は住人に空間の寒々しさを感じさせる結果をもたらした。

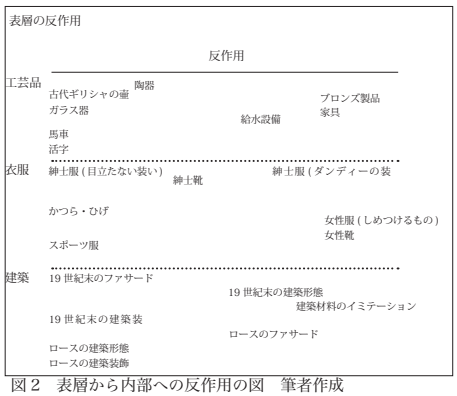
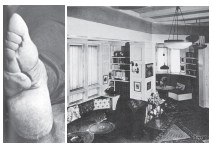


図２　表層から内部への反作用の図　筆者作成



上左：奇形化した足
『みっともない人体』p150
上右：ロースのインテリア
『SD』8709 号 p98
下：隠す部位の変遷
『みっともない人体』p35

第３章 19 世紀末ウィーンの被覆の一考察

前章までを通して、表層がその形成時に受ける影響と、表層が結果的に内部に及ぼした影響をみてきた。本章ではそれを踏まえ、19 世紀末ウィーンにおける表層の役割と性格を考察する。（図 3）

3-1 偽装：内部と外部の解離

1 章での分析で表層を誇張と隠蔽に分類したが、完全にどちらかの要素が消えるようなことは無いことが分かる。つまり、誇張する表層も隠す表層も共に内部と外部からある程度の距離をとっているということである。こうして表層は内部と外部を分つ役割を果たしていたのだ。しかし、19 世紀の表層はその解離が激しく、表層が内部を偽装するという現象が起きていた。

3-2 表層の反作用

2 章の分析から、表層は誇張する性質と隠す性質のどちらか一方が強くなりすぎると、内部に反作用を起こすことが分かった。表層は、この反作用によって修正が行なわれ、また正しい均衡状態を保つことが出来る。19 世紀末の表層は特に誇張する性質が強く、反作用もまた多数見受けられたが、それは偏った表層を修正に向かわせるものであろう。

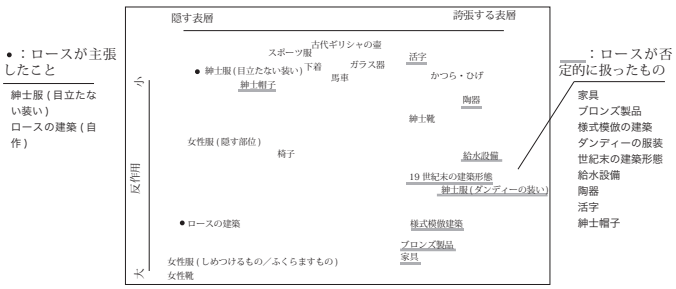


図３　19 世紀末ウィーンの表層の性質　筆者作成

結論

以上より、19 世紀末のウィーンの表層の主な構成要因は、階層社会のシステム、帝国社会、近代化を押し進める流れと抵抗する流れなどがあるが、その内外双方からの力を受け、内部から適度な距離を保つ事が表層に求められた事であると分かった。ロースが否定した装飾もこの距離を保つ手法の一つであった。しかし、世紀末においては、他者の視線を意識した内側からの力が大きくなりすぎたことで表層が内部と解離しており、それによって表層が反作用を起こしていた事が分かった。近代的な考え方で内部と表層の距離を締めようとしたロースの批判もこの反作用の一種と捉えることが出来る。19 世紀末ウィーンにおける表層とは、装飾やイミテーションにより内部との距離をとる事と、その反作用によって形成された事が分かった。

謝辞

本研究を書くに当たってご協力をいただいた翻訳者の菊池様をはじめ、研究者の方々に厚くお礼申し上げます。

1 ADOLF LOOS『Ins Leere Gesprochen』(Georges Cres et Cie 1921) ロースが装飾と犯罪に行き着く前の 1989 年にウィーンの有力誌に連載していた皇帝即位 50 周年記念展覧会のレビューを中心にまとめた本。2『装飾と犯罪』にも収録されているアドルフ・ロースの論考のタイトル「被覆の原理」を一部引用し、他者と自己との間に存在する表層のあるべき姿という意味で用いている。3 バーナード・ルドフスキー著『みっともない人体』(1979, 鹿島出版）の中で「人は服を着ることで、肉体をかくしているのであろうか。いやむしろ、肉体をあらわしているのではないか。」(p9) と語っている。現代の衣服をみても、表層は隠すだけでなく、誇張する側面を持ち合わせていることが分かる。4『Ins Leere Gesprochen』より、「これは十九世の終わりの自由労働者の仕事であり、彼は喜びから自分自身の仕事をつくりだし、早く、そして多くつくるのだ。」(「1898 年の家具」)「観衆に、職人自身によって感じられ、考案され、そして作られた家具を買うということを教えたのだ。」(「インテリア」)5『Ins Leere Gesprochen』より、「美しいものとはただ様式にあふれた《スタイルフルな》住宅のことだ、と教えられてきたのに。」(「ロトンダにおけるインテリア」)

＊早稲田大学創造理工学研究科　学部 4 年　　*Undergraduate student,School of Creative Science and Engineering,Waseda Univ.